

特別支援学級での教育的ニーズに応じたタブレット端末持ち帰りによる

家庭との連携支援

田島悠梨・城井順一（熊本県高森町立高森中央小学校）・山本朋弘（鹿児島大学大学院）

概要：特別支援学級での教育的ニーズに応じた支援を充実させるために、タブレット端末持ち帰りによる学校と家庭が連携した支援を展開した。児童がタブレット端末を継続的に家庭に持ち帰り、児童に関する情報や教科等での指導方法を家庭と共有しながら、学校と家庭が連携した支援を図るよう取り組んだ。保護者や児童へのインタビュー結果から、学校と家庭との連携が深まり、学習内容の定着に有効であることを示した。

キーワード：特別支援学級，タブレット端末持ち帰り，家庭との連携，情報共有，教育的ニーズ

1 はじめに

特別支援学級での教育的ニーズに対応するためには、学校と家庭との連携・協力は必要不可欠なものである。中央教育審議会答申(2009)では、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立ち関係機関が連携して、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた支援を実施するために「個別の教育支援計画」の策定を示した。策定に当たっては、保護者と協力し、子どもや保護者の意見を十分に聞いて、その教育的ニーズを正確に把握することが重要である。そのため、児童に関する情報や教科等での支援方法を家庭と共有することが求められている。

これまでは、連絡帳を中心に相互の情報を交流し、児童に関する情報を共有してきた。しかし、言葉や文字を介しての情報だけでは、それぞれの立場に基づく児童の捉え方を一方的に伝達することが多く、児童の情報に関して学校と家庭との認識に差異が生じることも少なくなかった。特別な支援を要する児童にとって、環境によって支援の方法が異なることは、思考を混乱させてしまうこととなる。日常的な児童の情報を共有化することが、よりよい支援を生み出し、児童の成長・発達につながると考える。

実際の子どもの情報を動画や静止画として伝達することは、子どもの実態を明らかにし、多

くの情報を共有することができる。それは、子どもの姿だけではなく、子どもが置かれている状況や周囲の子どもたちの様子、教師の指導法など子どもを取り巻く学習環境が含まれた情報であり、特別支援教育にとって非常に有効な情報源であると考えられる。

そこで本研究では、教育的ニーズに応じた支援を充実させるための ICT 活用として、児童のタブレット端末持ち帰りによる学校と家庭が連携した支援を展開することとした。

2 研究の方法

(1) 対象学級及び児童の実態

特別支援（情緒障害）学級在籍の小学校第4学年男児である。感情の起伏が激しく、周囲の児童と一緒に行動が難しい傾向があった。休み時間も特別支援学級教室において一人で過ごすことが多く、本を読んだり、パズルを行ったりする時間が多い状況である。

また、学習面においては、抽象的な概念を学んだり、楽器を演奏したりする経験が少なく、課題となっている。特に漢字の習得には苦労しており、本人の苦手感も強い。

保護者の願いとして、交流学級の児童とともに学ばせたい、学校での様子をできるだけ詳しく知りたいという思いがある。学校教育に対してとても協力的であり、ICT 活用の取組に対し

ても積極的である。本実践を進めるにあたって
も快諾していただいた。

(2) 研究の流れ

表1に研究の流れを示す。従来の連絡帳に加え、学校での学習状況や児童が作成した作品及び日常生活の様子、教師の支援の様子を動画や静止画でタブレット端末に記録し、コメントを入れて家庭へ持ち帰らせることとした。

家庭では、タブレット端末に記録された学校での様子を視聴し、コメントを書き込んでもらうこととした。また、家庭での様子もタブレット端末に記録し返信してもらうことで、児童の情報の共有化を図り、家庭と連携した支援をしていくことにした。

検証方法としては、学校から家庭へ持ち帰った動画と静止画の数を分類・整理を行うこととする。また、児童及び保護者へのインタビュー調査を行い、タブレット端末を活用した情報共有を行う上での利点や問題点を分析することとした。

3 実践の結果

(1) 事前準備

実践を進めていくにあたり、まずはタブレット端末の選定を行った。選定の際には、操作性、画像の鮮明さ、端末の軽さ、保護者も操作経験を考慮し、最終的にiPadを選択した。

保護者へは、学級懇談会の場で実践の趣旨を説明した。実践の了承を得た上で、タブレット端末の使い方や画像の視聴の仕方、コメントの入れ方について、実際に機器を操作しながら練習を行った。

(2) 記録の整理

記録した動画や静止画は、タブレット端末上のアルバムにフォルダを作成し整理した。実際に整理したものを写真1に示す。フォルダは大きく3つに分類し、「学校の様子(生活面)」「学校の様子(学習面)」「家庭から」とし、保護者が簡単な操作で画像を検索できるようにした。

(3) 学校からの投稿

写真2に学校での撮影の様子を示す。児童の

表1 本研究の流れ

事前準備	タブレット端末選定 保護者への説明
実践	(学校) 学習・生活の様子の撮影 コメント入力 (家庭) 感想コメント入力 家庭の様子の撮影 コメント入力
検証	動画・静止画の分類・整理 児童・保護者向けインタビュー

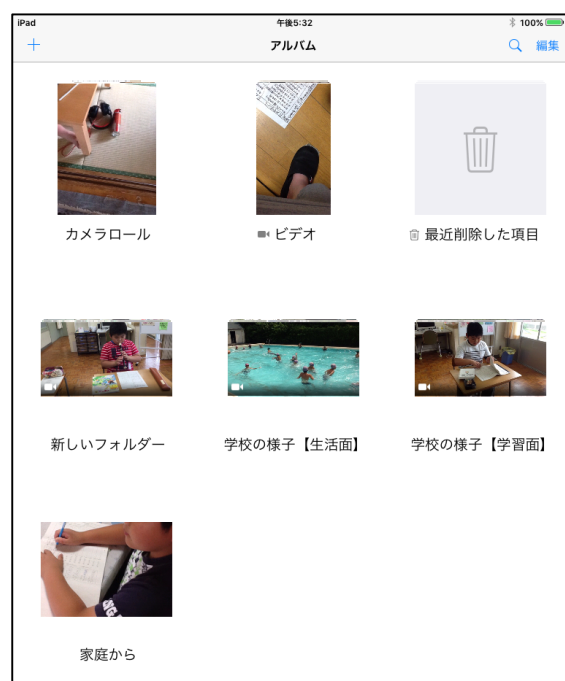


写真1 タブレット端末上に整理した様子



写真2 学校で担任が撮影する様子

課題となる部分の指導や保護者に伝えたい内容について動画や静止画での撮影を行った。

撮影内容としては、特別支援学級教室での学びの様子、交流学級での学びの様子、給食の様子、休み時間の様子を撮影した。また、授業で作成した作品も静止画としてアルバムのフォルダに収録した。

また、写真3に示すように、タブレット端末内蔵のメモアプリケーションを使って、コメントを入力するようにした。撮影した動画や静止画に対する気づきや、そこから家庭へ伝えたい内容について入力することで、効果的に家庭との情報共有を行なった。

(3) 家庭との情報共有

①漢字の学習について

児童の課題に一つとして、漢字の習得が挙げられる。そこで、特別支援学級での漢字の学習の様子を動画で撮影し、学習の手順や筆順指導の仕方などを家庭に伝えた。「これまでは、家庭でどう教えればいいのか分からなかったが、動画を見たことでやり方がわかった」との返信があった。児童も家庭学習の成果を翌日の漢字ミニテストで発揮し、自信をつけることができた。

②交流学級との交流

児童は他者と関わる時間が少なく、保護者も心配されていた。今後は交流学級での学習を増やしたいとの要望もあったことから、交流学級で一緒に学習している様子を動画で撮影し、家庭に伝えた。特に理科の授業では一緒に生き物を観察したり、友達と調査活動をしたりする様子を伝えた。笑顔で活動する児童の様子や友達の関わり方について具体的に伝えることができたため保護者に安心感を与えることができた。

(4) 家庭からの投稿

写真4は、家庭で保護者が撮影した児童の様子である。撮影内容としては、家庭学習の様子、日常生活の様子が投稿された。写真5は実際の撮影の様子である。撮影した画像には、撮影時の状況や児童の様子についてコメントが入力され、家庭での様子を教師は知ることができた。

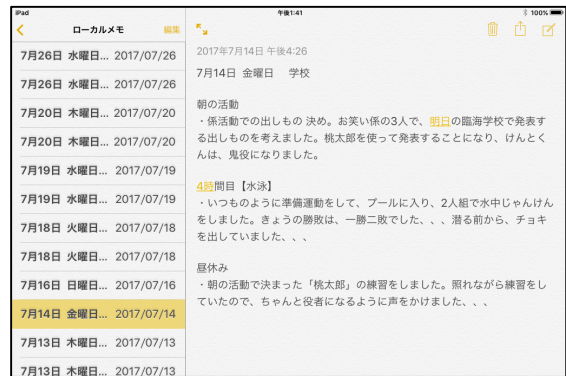


写真3 学校からのコメント入力の様子

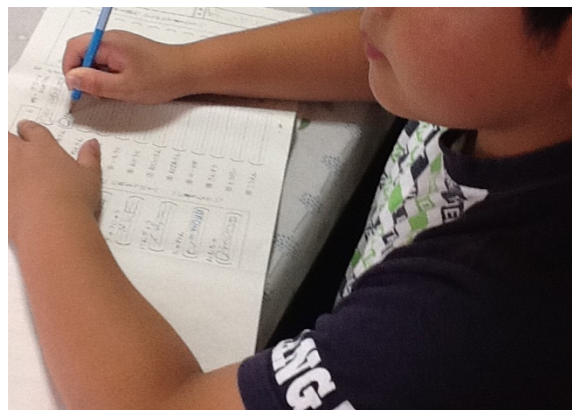


写真4 家庭で撮影された画像



写真5 家庭で撮影する保護者の様子

4 成果

学校から及び家庭から投稿されたコメント、動画、静止画の数を表1に分類・整理した。実践を始めた6月下旬から7月上旬までの児童の出席日数は19日であり、持ち帰り実施率は100%であった。

学校から投稿された情報は、出席日数19日のうち、動画が426%、静止画が53%となり動画の方を多かった。理由として、児童の課題が挙げられる。学習支援の仕方や実際の授業の様子などは動画の方が伝わりやすい。より具体的な

児童の様子を情報共有するために動画を選択した。また、静止画は主に児童の作品の記録として活用した。一方、家庭から投稿された情報は、動画が21%、静止画が32%で、静止画の方が多かった。理由として、保護者の児童を撮影する機会が少ないことが考えられ、短時間で児童の様子を伝えるために静止画が選択されたと思われる。

表2に学校から投稿内容の分類を示した。一人で学習する場面（学習）が21、交流学級で学ぶ場面（交流）が32、当番活動や給食など生活場面（生活）が15、遊びの時間等（その他）が22となっており、交流学級での様子の投稿が最も多かった。理由として、保護者の交流学級での学習の機会を増やして欲しいという要望があったことが挙げられる。次に学習場面が多くなった。内容としては、主に漢字の学習の様子やリコーダーの練習、水泳の練習の様子が挙げられる。年度当初、保護者が学習面に関して不安に感じていたことを中心に投稿した。

保護者からのコメントや保護者への聞き取り調査の結果を以下に示す。

- ・タブレット端末の映像を見る限りでは、椅子の座り方が十分にできていた。よく頑張っていることが伝わってきた。
- ・昨日は宿題が終わらず、最後まで粘り強く頑張っていた。その様子を画像で伝えることができることはありがたいと思う。
- ・動画を見たことで、子供の頑張りがよく伝わ

表1 投稿コメント・動画・静止画の分類

	日数	コメント	動画	静止画
学校	19	15	81	10
家庭	19	5	4	6

表2 学校から投稿内容の分類

	学習	交流	生活	その他
動画	19	32	15	15
静止画	3	0	0	7

ってきた。先生や友達と関わる様子が見られ安心した。

- ・一緒に動画を視聴することで学校のことを話す機会が増えた。学習の進め方も参考にして家庭で取り組むことができた。少しずつ落ち着いて学ぶことができるようになってきた。

5 まとめ

本研究の成果と課題を以下に示す。

- ねらいを持って撮影した動画や静止画を持ち帰らせることで、保護者の要望に応えたり、不安を払拭したりすることにつながった。
- 手書きの連絡帳と比較し、児童の具体的な様子を伝えることができた。学校では気づけない児童の小さな変化を見逃さず、家庭と情報共有することができた。
- 家庭学習でのつまずきの様子から、教師は次の支援へつなげることができ、学習内容の定着につなげることができた。
- この実践は、校内の特別支援学級にも広げていきたいと考えている。今後は、交流学級担任との情報共有にも活用し、特別支援学級に複数在籍する児童の特性にあった実践を検討していく。

附記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C）「授業と家庭学習を循環させるタブレット端末活用が思考力・表現力に及ぼす効果」（研究代表者 山本朋弘、研究課題番号 16K01120）の助成を受けて行った成果の一部である。

参考文献

- 文部科学省(2010)教育の情報化に関する手引
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm
- 文部科学省(2011)教育の情報化ビジョン
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/04/1305484.htm